
ROBOT

夜鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROBOT

【著者名】

夜鳥

【ISBN】

N6413C

【あらすじ】

捨てられた絡繆が命を終えるまでを描いた物語。

暗闇に消えてゆく夜風、攫われた髪がなびく。

肌で感じる風が心地よいとか、今田は暗いなあ…とか、そういつて微妙な感覚を感じるコトが出来るようになっていっここの体は、絡繹にしては古い型だった。けれど、今時の絡繹りと違い『自分』を持ち、外見は新型の絡繹に劣つても、人間らしく出来ていると胸を張つて言えるのは、そのせいで自分が苦しんでいたからだった。

自分を貫けば、気持ちを表せば、いらないと言われる。

そんな立場。

何も考えず、何も感じず、言われた通りに物事を進める、奴隸人形。

それが自分。

まだ生きている。まだ、動ける。

けれど『古いし時代遅れだし薄汚れてる』から、

『あなた、もういらない』

——… 古い、から。

それだけで自分は捨てられた。

自分ではどうにも出来ない悔しさが、人造のこの躯を突き動かしていった。

相変わらず、車のエンジン音や喋り声が五月蠅いが、今はその喧

噪にも興味はない。

今の自分はこの身を落ち着かせられる『場所』だけを求めていた。

幾ら新しい型になりたくてそう望んでも、この躯のままでは簡単には出来なくて、返つて大量生産された新型の方が安上がり、そして高性能で効率的で良いコトづくし。

だから古いのは捨てた。

理由は分かる。その方が人間は楽だからだ。実際もし僕が元からの人間だったら、気にせずそうしていると思う。

でも気持ちが納得出来なかつた。

持ち主の生まれる以前から働いてきた。なのに、あんな簡単に捨てられた。

ショックだつた。

絡繆に感じ得る感情ならば、自分は衝撃を受けていた。

そして氣の向くまま、足の向くままにたどり着いたこの廃屋のビルは、無機質にこの街の一部を構成している。

その廃ビルの屋上で、自分は、後少なくなり捨てられたこの生命を、眼下に広がる街をただ眺めることで、1秒1秒潰す事に専念した。

光に、人に、変わらず様々なもので溢れるこの街は、今日も明るく人々や様々なモノがにぎわう。
居場所を無くした自分なんかまるで関係なく、ただそこにあって、様々な何かを照らし続ける。

様々なもの。

主に言えば、服、靴、鞄、髪型、携帯、流行、人間、そして……
絡繆。後他諸々。

人間はそれを手に入れ、使い、利益を得て、捨て、どんどん新し

いものへ乗り換える。その繰り返し。

消費社会に生きる人間達は、捨てる側に生きているから、捨てられたモノの声を知らない。

そして捨てられたモノ達は、すぐに見つかって破棄される。文句も言わず、文句を言つ事も知らず、捨てられ壊される事に何の疑問も感じず消えてゆく。

人間は、それに対しても泣いたりしない。

それは『消耗品』だから。

いくらでも換えはあるものだから。

だから大切になんかしなくていい、雑に扱つて簡単に切り捨ててもいいと、そう思つてゐる。

特に何を感じる訳でもない、なのに自然とこぼれる涙は止めどなく溢れ、頬を伝い、固く冷ややかなコンクリートの灰色に湿つた点を残して、自分の今世への未練を表すかに見える。

(……未練か)

未練など、消える命には邪魔で、何の役にも立たない。

こんな邪魔な感情など、要らない。

捨てられるのは苦しいと、必要とされたいと、自分はまだ生きていたいと、そう叫ぶこの心も、辛いだけ。1分1秒に、その辛さは増していく。

要らない。
いらない。
イラナイ。

——…もう、こらない

いらないなら、必要とされないなら、生きている価値も、意味も、
無い。

糸の切れた絡繆は、直さない限り動けない。

また、風が髪を攫う。

掴んでいた鎧びたフェンスの手を離す。足が、躯が、コンクリートの固まりを蹴つて暗がりの空へと飛び出す。

一瞬の浮遊。

直後の急降下。

空気を切つて落下する躯は軋んで、踊るようになくるくる回る。
くるくる、くるくる、廻る視界は光に満ちて、鮮やかな七色を描く。

光の輪の中で踊るような感覚に捕われる。

命の潰える恐怖よりも、これまでに感じた事の無かつた強烈な浮遊感に目眩がした。

刹那。

誰の目にも留まらずに、その人形は地に落ちて砕け散った。

そして人形は夜の月となり、蒼白い横顔を覗かせながら、
せかせかと移りゆくセカイを毎夜毎夜眺めている。

碎けた欠片と散った心を集めながら、哀しみに流す涙を星に変え
て
：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6413c/>

ROBOT

2010年10月9日00時24分発行